

現サハリン南部における日本統治期建造物の残存状況について

鈴木明世

Key Words サハリン (Sakhalin)、樺太 (Karafuto)、歴史的建造物 (Historical architecture)、プロット (Plotting data on maps)、データベース (Database)

1 はじめに

日本における歴史的建造物の保存への取り組みは、1897 (明治30) 年の「古社寺保存法」に始まり、1929 (昭和4) 年の「国宝保存法」、1950 (昭和25) 年からの「文化財保護法」などの制度の中で行われてきた。また、1975 (昭和50) 年の文化財保護法の改正では、「重要伝統的建造物群保存地区」として建築単体だけではなく歴史的な集落・街並みを保存する制度が設けられた。古社寺に始まった建造物の保存の考えは、現在では民家や近代建築にまで対象を広げ、さらには単に保存するだけではなく、いかに活用していくか、といった考え方に変わってきた。「野外博物館 北海道開拓の村」(1983 (昭和58) 年開村) などの野外博物館も、そうした過程の中で計画されたものである。このような歴史的建造物及び建造物群は、日本ないし地域固有の生活・産業等の変遷が現れている文化遺産であり、地域の歴史を考える上で重要な要素となるのである⁽¹⁾。国内の歴史的建造物についてはおおよそ網羅的に把握されつつあり⁽²⁾、国内各地域の歴史について考証する材料となっている。

このような建築が内包する歴史的な価値は、国内のみならず樺太 (現:ロシア・サハリン州) や台湾、満洲 (現:中国東北部) などかつて日本が統治していた旧海外植民地についても適用しうるものである。これらの土地での日本統治期の建造物は現在でも多く残されており、それを基にした当時の社会状況について考察する研究も数多く行われている⁽³⁾。つまり、戦後数十年ののち、植民地当時の実物が残っているからこそ改めて建築史的な視点か

ら研究が可能になったのである。とりわけ本稿で扱う樺太についても、角幸博や井潤裕らによって残存する建造物の調査が行われており、サハリン南部全体にわたってその状況が記録されている⁽⁴⁾。また、近年では辻原万規彦らにより、大縮尺地図の収集整理が行われており、より詳細な市街地の分析が可能になっている (辻原・角 2018)。

歴史的建造物が持つ価値を考えると、現サハリンに残存する日本統治期の建造物は、当時の生活・産業などの状況や、戦後のロシア領下におけるサハリンの社会的な変遷を示す歴史資料と位置づけることができる。このような建造物の歴史的資料性は、建築学の分野を越えて活用可能なものであるが、サハリンに残存する日本統治期建造物を用いた研究は概ね建築史の範疇に留まっている⁽⁵⁾。

そこで、本稿を起点とする今後のサハリン研究を通して、サハリンに残存する日本統治期建造物を記録し、そこに多様な資料を包括的にまとめることで、歴史学や民俗学、地理学などの分野横断的な分析を可能とするデータベースの構築を行う予定である。そしてそれを基に、改めて日本統治期の建造物が樺太やサハリンにおいて果たした役割を見出すことが長期的な視点での本研究の目的である。データベース構築の展望は「5 今後の展望」に示す。

本稿ではその目的に向けた第一報として、2019年に行ったサハリンにおける実地調査の成果報告を行う。本調査では、今後の継続的な研究の基盤となるように、現在時点における日本統治期建造物の残存状況の把握を中心に行なった。

なお、本稿では便宜上、1905 (明治38) 年～1945 (昭和20) 年の日本統治の期間を樺太期、その期間のサ

鈴木明世：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ

- (1) 国や都道府県、市町村に指定や登録されている建造物は、特にそれが顕著であると認められたものである。しかし、その対象となっていなくとも、地域の歴史を示す建造物は多く存在していることを忘れてはならない。
- (2) 例えば、国宝・228件、国指定重要文化財・2523件、重要伝統的建造物群保存地区・120地区、登録有形文化財 (建造物)・12681件など、国による指定・登録のみでこれだけの件数がある (2021 (令和3) 年1月1日現在 文化庁ウェブサイト参照)。
- (3) 樺太以外の事例としては、西澤泰彦による一連の成果が代表的である。例えば西澤 (2009, 2011) では、満洲・朝鮮・台湾における日本統治期の残存建造物などをもとに、建設の歴史的背景や、建築技術などを通して、植民地支配における建築の役割やその技術的・形態的特徴などを見出している。また、日本統治下における第二次世界大戦以降の利用法などについて、満洲・朝鮮・台湾それぞれを包括的に掲載することで、各地での残存傾向を大まかに導いている。
- (4) 文末参考文献を参照されたい。特に、サハリン南部を全体的に調査し報告したものは角 (2003, 2007)、ITNANI・KADO (2003) などがある。
- (5) 建築史の範囲で考えると、都市史的観点からの分析を除けば、本稿で扱う既往成果は十全たる成果を残しており、それらの成果を基盤にすることで新たな視点で日本統治期建造物を捉えることが可能となった。

ハリン島における北緯50度以南の範囲を樺太として、現在のサハリンとは区別して述べることにする。

2 樺太の歴史概要

樺太の歴史概要について、特に本稿に関係する事項を中心に簡潔にまとめる。

1905（明治38）年に日露戦争終戦後のポーツマス条約によって、南北に細長い面積74,415km²の島のうち、北緯50度以南の約南半分を日本の統治下に置くこととなった。それに伴い1907（明治40）年に樺太庁が大泊に設置されたが、1908（明治41）年に豊原へ移転し、以後豊原が樺太の政治的中心都市となる。統治した当初は、樺太庁の置かれた豊原、海洋交通の窓口であった大泊、真岡の3地域を中心に人口が増え⁽⁶⁾、徐々に南樺太全体に市街地が展開し、1945年の段階では1市12町29村（計42市町村）が存在していた。主要産業としては、漁業や農業、大正期から林業や製紙・パルプ工業、昭和期には石炭業などが中心となった。特に製紙・パルプ工業は、国内生産の8割以上を賄う産業となった⁽⁷⁾。後述するが、その発展の過程で、製紙工場が樺太各地に建設さ

れ⁽⁸⁾、これに伴って敷香などの北部まで人口が増加していくことは（表1）からも見て取れる。また、樺太各地への製紙工場の建設による人口の増加や鉄道の開通などにより、石炭の需要も増加したため、各地に炭鉱が開坑し石炭業が中心産業の一つとなった（西鶴 1941）。

このような産業の興隆に伴う人口増加もあり、1920（大正9）年は約10万人であった人口が1940（昭和15）年には約40万人にも増加した（表1）。こうした発展の最中、1945（昭和20）年の第二次世界大戦終戦後にソビエト連邦の実効支配下となった。本稿で扱う建造物はこの40年の間に建てられたものである。

3 調査成果

(1) 調査概要

本調査は、北海道博物館とサハリン州郷土博物館による研究交流事業の一環として行なった。

表1 主要市町の人口変遷

地域	大正9 (1920)	大正14 (1925)	昭和5 (1930)	昭和10 (1935)	昭和15.16 (1940.1941)
全人口	105,899	203,745	295,196	331,943	414,981
豊原町(市)	12,125	22,010	31,903	34,689	37,160
敷香町	2,259	2,123	12,576	29,490	30,310
恵須取町	636	7,258	17,774	26,549	39,026
大泊町	12,490	25,460	23,315	24,030	21,779
真岡町	9,239	13,137	15,938	19,422	19,193
知取町	698	10,930	19,257	18,426	18,216
落合町	5,496	8,818	14,893	14,858	25,135
泊居町	6,938	9,333	12,223	12,819	11,177
本斗町	4,660	7,736	9,421	11,338	11,201
留多加町	2,968	7,279	11,158	10,237	7,295
野田町	4,114	5,568	7,299	8,471	7,366

『樺太沿革・行政史』（全人口及び昭和16年市町別人口にて参照）、樺太『樺太庁施政三十年史（上）』（昭和10年までの町別人口にて参照）を参照し作成。樺太における国勢調査の結果を基にしているが、昭和16年市町別人口は別途参考値として記載。

（表3）における製紙工場の操業年と比較すると、人口増加に産業が影響していることが分かる。つまり、大泊や留多加などの樺太南部は初期産業発展型で後年に人口増加が停滞している。それに対して、敷香や恵須取などの北部の地域が遅れて増加しているのである。



図1 調査地

Google My Maps を用いて作成。①～⑰の順番で訪問した。番号をつなぐ線は移動の軌跡である。この他に（表1）で示される地域については地図上に記載した。

なお、ロシア風丸太住居を確認するため、北緯50度以北まで調査を行っているが本稿では対象としない。

(6) 樺太庁設置に伴い、コルサコフ支庁、ウラジミロフカ支庁、マウカ支庁の3支庁が設置された。1908（明治41）年にこれら支庁はそれぞれ大泊支庁、豊原支庁、真岡支庁と改められた（西鶴 1941）。（表1）における1920（大正9）年の人口においても、この3地域の人口が突出して多いことが見てとれる。
 (7) 『日本紙業総覧』による。
 (8) （表3）参照。樺太における製紙工場の沿革は後述する。



図2 調査ルートの記録

Google My Maps を用いて作成。GPSロガーを用いることで、詳細な移動経路を記録し、kmlデータとして操作が可能になる。本報告以降のデータベース作成等においてはGISソフトなどを用いて整理を行う予定である。

調査日程：2019年10月14日（月）～28日（月）

調査地：図1参照

調査地の選定及びルートは、主にサハリン州郷土博物館によって、既往の蓄積⁽⁹⁾をより多く訪問できるように設定された。訪問した各地では案内をもとに限られた時間の中で、角らの調査で把握されていた建造物の再訪や、その後サハリンの研究者らによって発見された樺太期建設と考えられている建造物の確認を中心に調査を行った。さらに、筆者の事前調査をもとに、各地で樺太期の市街図を見ながらの散策なども行なった⁽¹⁰⁾。また、訪問した各建造物について、位置情報の記録、写真記録、簡易的な実測、現地の住民や郷土博物館等の有識者へのヒアリングなどを通して各種情報を記録するよう努めた。

本調査で特に重視した点は、各建造物及び調査ルートの位置情報の記録である。建造物を訪問した際は、その場でスマートフォンの地図アプリ（Google Maps）を用いて地図上にプロットを行い、またその調査の行程はGPSロガー（GARMIN eTrex 10）を用いて常に記録を取り続けた（図2）。これらの記録によって、後年同様の調査を行うことがあった場合に、効率よく再訪したり、訪れていない場所への調査を行ったりすることが可能となる。

(2) 調査成果概要

本調査では、廃墟や遺構を含め、86箇所の建造物及び建造物群を確認した（文末別表・別図 以降、参照する

場合は別○（番号）表2 訪問建造物の残存状態内訳

と付記する）。その残存状態の内訳を（表2）に示す。確認した建造物のうち、実に約45%が現在も使われて続いていた。

旧豊原における建造物や、製紙工場など樺太における主要な建造物の沿革など、

残存状態	件数
現在も使用（同様の用途）	21
現在も使用（別用途への転用）	17
未使用（建物としては残存）	12
廃墟	15
遺構	14
記念碑等	6
土木建造物等	1
計	86

個別的な事項については既往の成果によって多く明らかにされている⁽¹¹⁾。そこで本稿では、冒頭に示したように建築が生活・産業などの状況や、社会的な変遷を示す歴史資料であるとした時に、サハリンに残存するこれら建造物がどのように変容し、それがどのような意味を持つのか考察を交え検討したい。

(3) 残存建造物を通してみる樺太とサハリン

①都市構造を残した豊原

ユジノサハリンスク（旧豊原）は、樺太期には樺太庁が置かれ、現在はサハリン州の州都となっており、政庁都市として栄え続けてきた。サハリン以降、樺太期に形成された街路の軸は残しつつもアパート開発が進められ、実際の街並みとしては大きく変化してしまっていた。しかし、その中でも多くの樺太期の建造物が転用され残存していたことは角（2003）などに報告されているが、現在においてもその多くが残存していることを改めて確認した⁽¹²⁾。ここでは、ユジノサハリンスクと豊原を考える上で、現在も使われている事例を紹介する（図3）。

今回訪問した建造物の多くは、樺太期には軍事施設や官庁施設など樺太や豊原において重要な役割を果たしたものであった。特に（図3）中、⑤⑥の通りは軍事関係施設が集まる通りであり、また、①②⑨⑩の通りは官庁関係の通りであった。なお、この東端には樺太期に樺太神社が鎮座しており、市街地の主要街路としての位置付けもあった。これらの街路は豊原の市街地形成の上で特に重要なものであった（井澗 2007）。

(9) 角らによる一連の調査・研究の際に、現地の共同研究者として当時サハリン州郷土博物館の研究員であったI・A・サマリノも同行していた。それら調査以降も、同氏による調査が行われており、日本の研究者が把握している以上の情報を有していたのである。

(10) 事前の調査として、角らの一連の成果で発見されていた建造物のおおよその位置についての可能な限りのプロットや、樺太期の市街図と現在の地図の照らし合わせ、Google Mapsのストリートビュー機能を用いた市街状況把握などを行っていたため、各地での案内による調査の余剰時間で希望のエリアを散策することが可能であった。

(11) 例えば、角（2003、2007）では、豊原に残存する旧樺太庁博物館（現：サハリン州郷土博物館）や、旧拓殖銀行豊原支店（現：サハリン州美術館）などの主要な建造物について、文献調査による沿革や、実測調査成果の図面資料など詳細に記録されている。各地の製紙工場についての記載もあり、樺太期建造物の主要なものについては、現時点で最もまとめられている資料である。また、ITANI（2003）では、ユジノサハリンスク（旧豊原）の地図上に残存建造物のプロットがされている。その他、『伊藤組百年史』や『丸彦渡辺建設八十年史』などにも、それぞれの企業が担当した建造物の建設の経緯や当時の状況が記されている。

(12) しかし角（2003）などと比較すると、木造の住宅や官舎などがアパート開発などによって失われていたことも分かった。なお、本調査で確認した現在も使われ続けている38事例のうち11事例がユジノサハリンスクであった。



図3 ユジノサハリンスク（旧豊原）における残存建造物マップ
Google My Maps を用いて作成。番号は（別表・別図）に対応している。また、白丸（⑧ 鉄道官舎、⑪ 樺太護国神社）はそれぞれ廃墟と遺構になっている。なお、ユジノサハリンスクのグリッド型の街区は樺太期に形成されたものである。

樺太における政治的にも、豊原における市街地形成においても重要であった施設が、現在のサハリンにおいても、軍事施設や公共施設など重要な建物として利用されており、街並みの景色は大きく変わってしまったが、都市構造としては樺太期の影響が大きく残っていると捉えることができる⁽¹³⁾。それを表すかのように、樺太期の官庁関係の通りには、サハリン州政府の庁舎やサハリン国立総合大学など重要な施設が新たに建てられていた。

②企業城下町としての市街地・製紙工場の転用

製紙・パルプ工業が樺太における主要産業であったことは既に述べた通りである。特に大泊と豊原を除き、大正期に建設された工場は、第一次世界大戦の影響で国産パルプの需要が増加したことを契機としており⁽¹⁴⁾、市街地開発とともに樺太各地に広がっていった。

すなわち、製紙工場がある市街地は、工場を中心とした企業城下町とも言えるものであり、地域の発展の中核に大規模な産業があったのである（井潤 2007）。

製紙工場が建設され始めた当初は、王子製紙株式会社と富士製紙株式会社、樺太工業株式会社の大手3社が中心となっていたが、1933（昭和8）年に合併し、国内生産量の8割を超えるほどの一大企業となった。それによって、敷香町以外の工場は全て王子製紙によるものとなっている。これらの工場は戦後も稼働し続け、ユジノサハリンスク

表3 樺太における製紙工場と現在の用途

工場名	三社合併以前	操業年	現在の用途	別表図
王子製紙大泊工場	三井樺太紙料 →王子製紙	1914 (大正3)	発電所?	17
王子製紙泊居工場	樺太工業	1915 (大正4)	発電所?	72
王子製紙豊原工場	王子製紙	1917 (大正6)	発電所?	7
王子製紙落合工場	日本化学紙料 →富士製紙	1917 (大正6)	暖房 システム	42
王子製紙真岡工場	樺太工業	1919 (大正8)	敷地利用 用途不明	82
王子製紙野田工場	王子製紙	1922 (大正11)	廃墟	75
王子製紙恵須取工場*	樺太工業	1925 (大正14)	—	—
王子製紙知取工場	富士製紙	1927 (昭和2)	ゴミ廃棄場	51
日本人絹パルプ 株式会社敷香工場	—	1935 (昭和10)	廃墟	58

樺太庁編（1937）、角（2003）、王子製紙株式会社（2001）などを元に作成。現在の用途は、同行通訳や現地での聞き取り情報からのものであり、断言できない点も多いが、一部施設が転用されていることは確認した。また、転用されている場合も、用途に与する一部の建物のみ利用であるため、それ以外の建物は廃墟となっていた。
*本調査では、樺太北西部には訪問していないため、王子製紙恵須取工場の現況については不明である。

（旧豊原）とコルサコフ（旧大泊）を除く工場が、1990年代まで製紙工場として使用され続けていた。しかしソビエト崩壊を機に廃業となり、現在製紙工場として稼働してい

(13) 後述の製紙工場とその転用もまた都市構造を考える上で重要なものである。
(14) 「ヨーロッパからの洋紙・パルプ輸入は第一次世界大戦によって激減した。そのため、一九一七（大正六）年には、パルプの国内生産量が増加した。そして、その約三分の一を樺太産が支え、一九一〇年代後半に製紙業各社は樺太に第二、第三の工場建設を進めた。」（三木 2006）。

る工場はない（井澗 2007）。その後の経緯は不明だが、筆者が訪問した際に多くの工場が、施設の一部を転用して活用している様子を見ることができた（表3）。

この理由として、製紙工場などの大規模工場は、発電・暖房等と類似した空間・設備を既に有しており、機械の導入のみで容易に用途を変更可能であったとことが考えられる（図4）。また、解体・新設することによる産業廃棄物の処理の問題や、ソビエト以降のコンクリートの質が、樺太期の日本製のコンクリートに比べ大きく劣っている点も、建物を再利用する理由として挙げられる⁽¹⁵⁾。例えば、ユジノサハリンスク（旧豊原）の工場は、再利用する建物について、開口部をコンクリートブロックで埋めるなど用途に合わせて手を加えている様子が見られた（図5）。



図4 煙突から発煙している様子
トマリ（旧泊居）の工場では、発電所として転用されていると情報を得て、実際に稼働している現場に居合わせることもできた。新築の石炭貯蔵庫もあったため、石炭による火力発電と考えられる。



図5 転用建物への手の加え方
半分近くの開口部をソビエト期のコンクリートブロックで埋めている様子が見られた。建物内の空間の使い方に合わせて手を加えていると考えられる。

製紙工場の建設とともに開発された市街地が多く、用途は変わろうとも、工場が稼働していることで樺太期の都市構造の骨子が失われずに残り続けていると捉えることができる。ただし、使用していない建物については老朽化の進行が激しく、製紙工場のランドマークである製葉塔なども、維持修繕工事等が必須な状態であった⁽¹⁶⁾。

③住宅の広がり再利用

残存する樺太期の住居は、現在でも使われ続けているものも確認できたが、廃墟のまま放置されている事例も多かった。特に、木造の住居の多くは外観をロシア風板壁に改造しているため、住み続けている場合は目視判定ができなかった（図6）。そのため、今回確認した以上に残存していると考えてよいだろう。また、市街地を調査する中で、既往成果にはない建物を樺太期建設と判定するため、屋根に関する2つのポイントに注目した。一つは、屋根構造が和小屋組であるかどうかであり、他方は、北海道の住居でも広く用いられていた葺草屋根であるかどうかである（図7・8）。つまり、屋根にいずれかの日本建築の特徴が現れているか、といったことを注視して調査を行った。しかし、屋根構造はもちろん、葺草の上にルーフィングもなされ、確認できない場合が多かったため、主に廃墟での判断材料となった。なお、住宅において葺草屋根は、北海道を中心に展開した技術である。樺太全体でその屋根が見られることは、北海道と樺太の関係を考える上で重要な要素である。

上記のような個別的事例の他に、ソコル（旧大谷）やレオニドヴォ（旧上敷香）では、軍関係の官舎街の住居が多数使い続けられていた（別44・60）（図9）。いずれも主構造が煉瓦造であり、外壁に塗装や板金を貼るなど劣化を抑えるように手が加えられていた。官舎としての機能性や煉瓦造による耐久性などの利点によって、多くの住居が使われ続けていると考えられる。これらの地



図6 ロシア風板壁の様子

ロシア製の住居に多く見られた特徴と一致している。外観だけでは判断が難しくなってしまう。トマリ（旧泊居）にて。（別74）



図7 和小屋組の様子

小規模な住宅において最も簡素で基本的な和小屋の形式の事例である。ガスチェロ（旧内路）にて。（別57）



図8 屋根から露出する葺草

北海道の住宅で多く用いられた屋根の形式で、その上にルーフィングが施されていく過程が窺える。ユジノサハリンスク（旧豊原）にて。（別9）

(15) 現地でのヒアリングの際に、「日本製のコンクリートは丈夫で品質が良いため、ソビエト時代に建てられたコンクリート造の建物の方が早く壊れてしまう」といった話もあった。

(16) この項目の執筆後、2021年1月19日付け北海道新聞にて、王子製紙落合工場が老朽化が進み、修繕不可能であるとして解体予定である旨の考えが落合市長によりなされたことが記事になった。



図9 多数の住宅が利用され続ける旧官舎街
左：ソコル（旧大谷）（別 44）/右：レオニドヴォ（旧上敷香）（別 60）

域は当時の街並みを想起できる貴重な地域である。

また、ガステロ（旧内路）の軍関係の官舎街であったと思われる場所には、ソコル（旧大谷）に残る官舎と同型の住居が残っていた（別 54）。その他、各地の王子製紙の旧社宅街や、一般市民の住宅でもそれぞれ類似した特徴を持つ住居が見られた。樺太における住宅事情についての検討材料になると考えられる⁽¹⁷⁾。

屋根の技術や外壁の変容、旧官舎街の一群として残る住居の特徴、規格化された住居、当時の建設産業の事情やサハリン以降の変容傾向など、残存する住居には多くの情報が含まれていた。しかし、近年のアパート開発によって多くの建物が失われており、既往成果で報告されていた旧社宅街等の住宅群も本調査では発見できなかったものもあり、次回訪問の際にはさらに多くが失われている可能性がある。現在状況の記録としても価値のあるものとなった。

④歴史的価値の再発見

サハリンにおける樺太期の建造物について、その歴史的な価値を重視し、文化遺産として積極的に残していこうとする動きが見られた。それは、日本における文化財建造物として指定や登録などと同様のものであり、前述の旧樺太庁博物館（現：サハリン州郷土博物館）、旧拓殖銀行豊原支店（現：サハリン州美術館）などがそれに該当する。このような文化遺産の指定制度のほか、日本との国際交流基金を用いた保護事業として、角ら樺太時代の史跡保存事業専門家調査団が2010年に旧拓殖銀行大泊支店（別 18）の保存活用に向けた調査・提案を行っている（史跡保存事業専門家調査団 2011）。本調査の段階では改修工事の最中であった。また、旧樺太庁会議室

（現：ロシア軍検察庁事務所）も、樺太期以降に改築された部分を可能な限り当初の状態に戻すための復元工事が行われていた⁽¹⁸⁾。このような、サハリンにおいても主要な施設として転用された建造物の工事事例が見られた。

そのほか、北緯50度線近辺に残存するトーチカ（別 62）やスミルニフ（旧気屯）にある弾薬庫（別 61）などには、説明板が設けられ戦争遺産としてその存在を忘れないようにされていた。また、ブズモリエ（旧白浦）やトマリ（旧泊居）には神社遺構として鳥居が残存しており⁽¹⁹⁾、観光を主目的とした参道整備が行われていた（別 45.64）。特に、旧泊居神社には、地域の郷土資料館職員らの尽力により、日露併記の説明板も設置されていた（図10）。観光を目的とするその他の事例として、ドリンスク（旧落合）の郷土資料館では、樺太期の建造物や記念碑等を周遊できるような取り扱いを検討している最中とのことであった。

さらに、ホルムスク（旧真岡）においては、奉安殿⁽²⁰⁾を象徴的なモニュメントとして扱った公園がつくられていた。これは、上記の事例とは対照的に、当初の建物とは異なる意味を持たせる価値づけが行われていることになる⁽²¹⁾。

以上のように、サハリン州全体において、行政事業から地域の活動まで、様々なかたちで樺太期の建造物を再評価し、歴史的建造物として整備・活用を始めていることが確認できた⁽²²⁾。この活動が継



図10 整備された参道（上）と遺構に対しての説明板（下）
鳥居などの神社遺構に安全に訪れることができるよう、参道に階段が新設されている。また、説明板は、境内の各遺構に対して設置されており、鳥居や手水などが日本においてどのような意味を持つのかなどの説明がされていた。トマリ（旧泊居）にて。

(17) 角（2003）や角哲・角幸博・石本（2004）において、王子製紙社宅街の詳細な調査が行われており、本調査でも社宅街であった場所で残存する住居を発見できた。

(18) 現地でのヒアリングによる情報。

(19) 神社遺構自体はサハリン各地に残存しているが、鳥居がそのまま残っているのは数少ない事例である。角（2003）では、この二箇所他にウグレゴルスク（旧恵須取）にも残存していた記録があるが現在は不明である。

(20) 奉安殿とは、1910年代頃から第二次世界大戦以前までの間に、天皇・皇后の御真影や教育勅語を納めていた建物である。特に小学校に多く付属していた。サハリンにおける奉安殿については、I・A・サマリ（2004）がある。本調査での記録や既往の成果などと北海道内で残存する奉安殿との比較研究などを行うことで、樺太における奉安殿の特徴を見出すことができるだろう。

(21) Google MapsにてШкольный павильон（school pavilionの意）として登録されており、建物の意味が忘れられたわけではないようである。

(22) このような活動の成果か、樺太期建造物の歴史的な価値が一般市民にまで浸透し始めている一例として、2021年1月8日「北海道新聞」（14版28面）における旧豊原市庁舎の解体・保存問題の記事を挙げる。建物の老朽化が原因で、解体・新築や保存活用などの方針をユジノサハリンスク市が電話投票で調査を行った。その結果は、解体新築が過半を越え、次点で保存・整備ということになった。しかし、この結果を巡り市民からあり得ない結果であると反発があったようである。この問題については、2021年2月現在結論が出ていないようであるので、引き続き注視していきたい。

続されより広範に広がれば、サハリンの市民にとって、樺太が過去の歴史としてではなく日常の中で意識されるものとなるだろう。

⑤さまざまな転用事例

①～④まで、多種にわたる活用・転用事例を紹介してきた。これらはいずれも建物そのものの基本的な構造や、住宅など建物固有の意味合いを大きく変えるものではなかった。本項では、大きく用途や構造を変更した転用の事例や、広義に捉えた転用の事例を紹介する。

ユジノサハリンスク（旧豊原）の転用事例では、建物の構造は大きく変えず、内装を変化させる程度のものであった。しかし、ガステロ（旧内路）にあった旧税関施設では、十字形の平面を内部で4分割し、別荘や倉庫などとして別々の世帯で利用していた（別55）。建物内部は所有者により壁や内装を大幅に変化させていたり、ほとんど手を加えずに棚のみ設置していたりと自由に活用しており、木造建築の可変性を有効利用していた。

また、ドリンスク（旧落合）では、蔵として建てられた建物が、増改築を経て住宅として転用されている事例があった（別40）。日本建築において店舗兼住居として用いられた見世蔵造りのような形式になっており、日本の伝統的な建築様式を想起させる変化が生じていた。

次に、市民による無意識な空間転用として、マカロフ（旧知取）の旧知取神社跡を取り上げる（別50）。ここには、拜殿や本殿の基壇が遺構として残存しており、かつて神社の境内であったことが明白な状態となっていた。そのような空間であったことは意識されていない⁽²³⁾と思われるが、現在のマカロフの市民が集まる広場となっていた。コンクリート造の基壇が、物を置く、座る、遊ぶといった動作に適しており、街を見下ろす良好な立地も相まって居心地の良い空間となっていると考えられる。筆者が訪問した際には、バーベキューが行われていた。このように、その場所が潜在的に内包する、不特定多数が集まるという空間的な素地が現在にも引き継がれ、公園的利用の憩いの場として空間的な転用が行われたと捉えることができる（図11）。



図11 象徴的なモニュメントと化した奉安殿
ホルムスク（旧真岡）にて。

最後に、特殊な事例として樺太期の列

車の転用を紹介する。ブズモリエ（旧白浦）にて、住宅の敷地内に鉄道車両が置かれていた（別48）。住民に聞き取りを行うと、その家系で漁が盛んだった頃に、漁師たちの食堂として卓を囲む部屋となっていたようである（図12）。現在は使われていなかったが、建物だけではなく樺太期の近代遺産も、都合良く転用を行うことが可能であったのである。



図12 旧境内でバーベキューを楽しむ境内という広々とした空間が居心地の良さをつくっている。神社遺構の基壇を荷物置きにするなどの様子が見られた。マカロフ（旧知取）にて。



図13 漁師の食堂であった車両
漁が盛んだった頃には、中心に長机を置き、皆で食卓を囲んでいた。多くの人を運ぶ列車の空間をうまく転用した事例である。ブズモリエ（旧白浦）にて。

(4) 残存建造物を通して見る樺太とサハリン

以上、現在でも利用されている建物を中心にまとめた。短期間で形成された市街地は、都市機能上重要な施設や産業を中心とした企業城下町として計画された。そこで中心となる建造物は、長い年月の経過にも耐えるほど構造・材料が丈夫であり、現在のサハリンにおいて、それらは転用されつつも都市の骨子であり続けていることが分かった。豊原や大泊は、そうした視点でも既往研究が行われているが、産業とともに発展した市街地については十全な研究は行われていないため、今後の展開の一つとして調査を進めるべきである⁽²⁴⁾。

住宅においても、廃墟となるか使い続けられるか、などの比較を通して、樺太からサハリンへの変化を辿る材料となり得るものであった。とりわけ煉瓦造の軍官舎街は形もほとんど変わらずに使い続けられていたことは特筆すべきことである。また、廃墟になってしまうような小規模な住宅からは、屋根の内側など通常は見えない部分が見えることによって北海道的な建築技術が用いられていたことが分かった。また、類似した形の住宅が見られるなど、樺太期の建設事情を探ることが可能である。

本調査で特に重視したい点は、樺太期の建造物を、歴史的・文化的に価値があるものと認め、それを整備し広

(23) 訪問した際に、散歩で来ていた地元住民に知取神社が写されている絵葉書を見せた際の反応などから。

(24) 豊原や大泊などの主要な都市や、製紙工場の官舎街などについては角哲・角幸博・石本（2004）にて報告されている。しかし、市街地形成の観点でみると未だ調査すべき事項は多い。近年、辻原・角（2018）にて大縮尺の市街地の地図が収集・整理されたので、都市史的観点でも樺太研究はより発展可能である。

く紹介しようとする動きが各地で見られたことである。樺太期の残存建造物は、かつてサハリンは日本に統治されていたこと、現在のサハリンの中に樺太の影響が多く見られること、そうした過去と現在をつなぐ歴史を実体として知らしめるものである。このような貴重な歴史遺産を日露が共同して価値づけを行っていきように動くことが必要であろう。

今回の報告で触れた事項の他にも、国内では北海道の他には多く残されていない奉安殿や、樺太における軍事関係施設の状況、煉瓦等の建築材料の流入⁽²⁵⁾など注目すべき事項は多々存在することは記しておく。

5 今後の展望

サハリンに残存する建造物が、樺太期の生活・産業などの歴史を示す資料の一つであると捉え、本調査の蓄積や、文書や古写真等の各種歴史資料、樺太から引き揚げてきた方々への聞き取り資料など、それらを包括的に比較検証することで、今後の樺太調査にさらなる発展が望めるだろう⁽²⁶⁾。以下に、今後作成する予定のデータについて、その展望を記す。これらは、個別のデータとしてではなく、包括的で継続的に更新可能なプラットフォームとして作成する予定である。

①建造物の履歴や資料を連携付けた残存建造物マップ

本調査で作成した建造物マップは、別表に示した情報のみが記録されている。例えば、一つの建物に着目した際に、現況の写真・古写真・図面・関連する文書等資料・聞き取りに調査における関連事項などの資料を、建物に紐づけることで、簡単に資料を比較・参照することが可能になる。また、今回は行っていないが、過去の調査から現在までに失われた建物も記録すべきものである。

②過去と現在を空間的につなぐ時層地図・写真

樺太期の古写真や絵葉書など、当時の建物や生活の情景が記録された資料は数多く存在する。また、ソビエト期以降に調査を行った研究者や写真家などによる成果は、樺太期から現在までの経過を段階ごとに辿ることができ



図14 トマリ（旧泊居町）における古写真と現在の写真の重ね合わせ

筆者撮影の現況と稚内市立図書館提供の絵葉書をもとに作成。現在の風景の中にありし日の姿を浮かび上がらせることができる。

る記録となっている。例えば、現在の地図の中に、樺太期の市街図を重ねると、当時の状況とともに各種データを参照できるようになる。また、現在の写真に過去の写真を埋め込むことで、過去の情景が現在の中に現れるような「時層写真」を作ることでもできる⁽²⁷⁾(図14)。単に、撮影地点の位置情報を付加するだけでも意味があるが、過去と現在を繋ぐ一手を加えることで資料価値がより大きいものになると考えられる。

③その他関連資料への位置情報の付加

例えば、引き揚げ者への聞き取り資料や新聞記事など、場所と情報を一致させることができるものについては、位置情報を付加することで、地図上からの参照が可能になる。ただし、選択する情報について、ある程度テーマを絞らないと情報が散乱してしまうため注意が必要である。

6 まとめ

サハリンに残存する樺太期の建造物は、当時の生活・産業などの展開を示すだけでなく、樺太からサハリン

(25) 井濶・越野・角・高橋・石本(1997)では樺太における建築活動の展開について、技術者や営繕組織を通して述べられており、角(2007)では樺太日日新聞の記事を通して、建設活動の展開をまとめている。このような建設活動については既に十全な成果が出ている。また、材料の観点で見ると、И.А. Самарин(2018)では、サハリンで発見した225種類の煉瓦のうち160種類の日本製煉瓦(同種の重複含む。)についてまとめられている。建設活動の展開の中で、建築材料や建築技術がどのようにサハリンに流入したかを把握することは大いに意義がある。

(26) 当館(旧開拓記念館含む)の職員らによる過去の研究や、樺太連盟が行ってきた資料の蓄積、稚内市が行っている樺太引き揚げ者への聞き取りの記録など、既に相当数の既往成果が存在している。つまり、これらの成果を個別的に扱うのではなく、分野横断的に統括された体系的なデータとして扱うことができれば、資料価値の相乗効果が得られるのではないかと考えている。特に成果イメージとして考えている事例として、渡邊英徳を中心とするグループによって制作された「ナガサキ・アーカイブ」(<https://nagasaki.mapping.jp/>)、「ヒロシマ・アーカイブ」(https://hiroshima.mapping.jp/index_jp.html) (2020.1.31閲覧) などがある。

(27) 似たような事例は多々あるが、筆者が特に影響を受けたのは一般財団法人日本地図センターによるアプリケーション「東京時層地図」(2013)や「Looking Into the Past (12 Amazing Photo-in-Photos)」(2009.12.11公開) (<https://mymodernmet.com/looking-into-the-past-12/>)、「The Ghosts of World War II」(2010.7.30公開) (<https://mymodernmet.com/the-ghosts-of-world-war-ii/>) (2020.1.31閲覧) などである。石川初はこのような試みを「時層写真」と呼び、過去と現在をつなぐ時間の層(時層)の断面を捉える手法として著書で紹介している。建築や土木構造物、樹木、地形などの人々の日常に対して「時間スケール」が大きいとき、その「時間」性は「変化の痕跡」として現れる。このような、「私たちの日常スケールよりもゆっくりとした時間で変化してゆくもの」に対して、その変化の現在の瞬間が切り取られて見えていると感じる時に、より長い「時間」に私たちは思いを馳せる」のである(石川2012)。

への変化の過程を辿ることもできる貴重な歴史資料である。本稿は長期的な視点でのデータベース作成等に向けた基礎調査として、訪問した建造物のみを対象にまとめ作業を行った。限られた時間のため、訪問できなかった地域も多く、訪問した地域でも見るのできなかった建造物も多い。それらの収集のため、樺太期の残存建造物調査は引き続き行なっていく必要がある。

その上で本稿では、現地調査にて訪問した樺太期の建造物(群)86件をもとに、特に樺太からサハリンへの社会的変容について分析を行う歴史資料としての捉え方の一端を紹介した。とりわけ、使い続けられる建物の多くは鉄筋コンクリート造や煉瓦造のような木造に比べ気象による腐食・劣化が生じにくい構造⁽²⁸⁾であったり、樺太期の重要な建物であったりするものが多かった。その他、樺太期建造物の歴史的価値を認め、サハリン各地で積極的に維持しようとする動きも確認した。建物が残り続けるためには、そうした地域の意識が重要である⁽²⁹⁾。

今後の展開として、樺太期やサハリンにおける過去と現在の間をつなぐために、関連資料を収集し、包括的に整理することで、分野を横断して分析可能なデータベース作成への指針を示した。このデータベースは一般への公開も視野に入れている。それを通して、長期的な視点として、日本統治期の建造物が樺太やサハリンにおいて果たした役割を見出すことを目指していく。

本調査を行うにあたって、サハリン州郷土博物館による全面的な支援を頂いた。また、NPO法人歴史的地域資産研究機構(れきけん)の角幸博氏には事前に多くの情報提供を頂いた。ここに記して謝辞とする。

参考文献

樺太庁編 1936(復刻版:1973). 樺太庁施政三十年史(上)(下). 王子製紙販売部調査課編 1937. 日本紙業総覧 昭和12年版.
 樺太庁編 1937. 樺太要覧.
 西鶴定嘉 1941. 樺太の歴史. 国書刊行会.
 北海道編 1971. 樺太基本年表.
 井潤裕・越野武・角幸博・高橋学 1997. 南サハリンにおける日本統治期(1905-45)建築の現存状況.
 社団法人全国樺太連盟編 1978. 樺太沿革・行政史.
 井潤裕・越野武・角幸博・高橋学・石本正明 1997. 南サハリンにおける日本統治初期(1905~1915年)の建設活動と営繕組

織. 日本建築学会北海道支部研究報告集 70: 649-652.
 伊藤組創業100周年記念事業推進委員会 1998. 伊藤組百年史.
 丸彦渡辺建設社史編纂委員会 1999. 丸彦渡辺建設八十年史.
 高橋学・越野武・角幸博・井潤裕 1998. 樺太日日新聞にみる昭和初期南サハリンの建築活動. 日本建築学会北海道支部研究報告集 71: 577-580.
 越野武主査 2000. サハリンの住宅における歴史的背景と居住環境に関する研究—戦前期住宅と現代のライフスタイル—. 住総研研究年報 27: 297-308.
 王子製紙株式会社 2001. 王子製紙社史 本編.
 角幸博・石本正明・井潤裕・松本浩二・角哲 2002. 南サハリン 東部および西部の日本統治期(1905-45)建築の現存状況. 日本建築学会技術報告集 15: 335-338.
 Hiroshi ITANI, Yukihiro KADO 2003. ON THE INVESTIGATION OF JAPANESE HISTORIC BUILDINGS IN YUZHNO-SAKHALINSK. 日本建築学会計画系論文集 571: 121-128.
 角幸博(代表) 2003. 南サハリンにおける日本統治期(1905-1945)の建造物に関する広域実態調査報告書.
 角哲・角幸博・石本正明 2004. 樺太における王子製紙株式会社社宅街について. 日本建築学会計画系論文集 第577号: 173-179.
 I・A・サマリソ原著・ムカイダイス訳・井潤裕監訳 2004. 南サハリンにおける天皇制イデオロギーの物質的遺構(a) 一旧樺太における奉安殿の遺構を中心に一. 歴史民俗資料学研究 9.
 三木理史 2006. 国境の植民地・樺太. 塙書房.
 角幸博代表 2007. 南サハリンにおける日本期の建築活動に関する研究.
 井潤裕 2007. サハリンのなかの〈日本〉—都市と建築—. ユーラシア・ブックレット 108. 東洋書房.
 西澤泰彦 2008. 日本植民地建築論. 名古屋大学出版会.
 樺太時代の史跡保存事業専門家調査団編 2011. 樺太時代の史跡保存事業(ユジノサハリンスク)に係る調査・検討報告書. 独立行政法人 国際交流基金.
 西澤泰彦 2011. 植民地建築紀行: 満洲・朝鮮・台湾を歩く. 吉川弘文館.
 北海道神社庁 2013. 樺太の神社.
 石川初 2012. ランドスケール・ブッカー地上へのまなざし. LIXIL出版.
 И.А. Самарин 2018. САХАЛИНСКИЙ КИРПИЧ. (SAKHALIN BRICK(筆者英訳))
 辻原万規彦・角哲 2018. 戦前期における樺太の大縮尺都市地図の収集と整理. 日本建築学会九州支部研究報告 57: 677-680.
 辻原万規彦・角哲 2018. 戦前期樺太火災保険特殊地図集成: 付・樺太庁発行市街図・旧版海図ほか. 柏書房.
 辻原万規彦・角哲 2018. 戦前期における樺太の大縮尺都市地図の概要. 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北). pp. 67-68.

(28) あくまで補修等の手を加えない場合である。日本における古民家のように適宜修繕を行えば、より長持ちするのは木造建築であろう。

(29) それでも全ての建造物が残り続けることはあり得ず、失われることもある。むしろそれは時代が進む上で当然のことであり、失われることもまた、そこでの社会的変容を分析する情報の一つとなる。そのため、本調査にて現時点でどこに、どの建造物が、どのような状態で存在しているか、を記録できたことが重要なのである。

別表 (1/2)

No.	旧名称	取用途	現用途	残存形態	緯度	経度	築年	構造	階数	備考
樺太期地名 現地名										
Yuzhno-Sakhalinsk ユジノサハリンスク										
1	樺太庁博物館	サハリン州郷土博物館	サハリン州郷土博物館	同用途での使用	142.744447	46.95903	RC	2	井瀬ほか (1997)	
2	豊原助役場	事務所	事務所	転用	142.732666	46.958569	RC	3	井瀬ほか (1997)	
3	樺太庁部長官官舎	軍事施設	軍事施設	転用	142.73567	46.961458	木	1	井瀬ほか (1997)	
4	拓殖銀行豊原支店	銀行	サハリン州立美術館	転用	142.729509	46.961097	RC	2	井瀬ほか (1997)	
5	不明	事務所	事務所	転用	142.730752	46.964528	RC	2	井瀬 (2007)	
6	守備隊司令官官邸	軍事施設	軍事裁判所	転用	142.736132	46.964071	木	2	井瀬ほか (1997)	
7	王子製紙豊原工場	発電所	発電所	転用	142.732329	46.970419	RC	-	井瀬ほか (1997)	
8	鉄道官舎	-	商店	廃墟	142.7205393	46.9600735	木	1	証書屋遺露出	(井瀬 2007) における鉄道官舎街のエリアに立地。
9	樺太庁会議室	ロシア軍検察庁事務所	ロシア軍検察庁事務所	転用	142.737563	46.959922	RC	2	井瀬ほか (1997)	
10	蔵	同用途での使用	蔵	同用途での使用	142.737166	46.95947	RC	1	井瀬ほか (1997)	
11	樺太園田神社	公園	公園	遺構	142.7595375	46.957503	-	-	井瀬ほか (1997)	
12	豊原病院	同用途での使用	病院	同用途での使用	142.732367	46.955503	RC	3	井瀬ほか (1997)	
13	産業倉庫群	店舗	店舗	転用	142.725619	46.959995	煉	1	井瀬ほか (1997)	
14	娘屋倉庫	倉庫	倉庫	同用途での使用	142.7704608	46.6264473	煉	1	案内による	
15	東正神社	-	博物館展示	遺構	142.7770908	46.6321643	-	-	市街図より	参道の階段の残存。
16	泰安殿	博物館展示	博物館展示	建物遺存	142.7796173	46.6330421	RC	1	案内による	
17	王子製紙大泊工場	発電所	発電所	転用	142.77856	46.62508	RC	-	案内による	建物内に樺太期の機械用の鉄骨が残存。
18	拓殖銀行大泊支店	銀行	銀行	転用	142.772356	46.625654	RC	2	井瀬ほか (1997)	改修工事中
19	拓殖銀行支店長宅?	軍事施設	軍事施設	転用	142.771558	46.625529	木	2	井瀬ほか (1997)	
20	煉瓦倉庫群	倉庫?	倉庫?	同用途での使用	142.7704608	46.6264473	煉	1	井瀬ほか (1997)	
21	娘屋倉庫	倉庫?	倉庫?	同用途での使用	142.77186	46.62494	煉	1	井瀬ほか (1997)	
22	右邊倉庫	軍事施設	軍事施設	同用途での使用	142.77066	46.62432	煉	1	井瀬ほか (1997)	
23	船組運搬機整備工場?	整備工場?	整備工場?	同用途での使用	142.77066	46.62432	煉	1	井瀬ほか (1997)	
24	樺太庁大泊庁舎	ロシア正教会教地	ロシア正教会教地	遺構	142.766239	46.644112	-	-	市街図、大泊史からの推測	
25	-	遺物集積	記念碑等	記念碑等	142.78226	46.63622	-	-	現地確認	
26	住宅	廃墟	廃墟	転用	142.758187	48.5712585	木	1	証書屋遺露出	
27	気象観測所	未使用	建物遺存	建物遺存	142.7654152	46.6461639	RC	1	大泊史	
28	日本軍上陸記念碑	-	記念碑等	遺構	142.7647695	46.6462562	-	-	市街図	
29	Prigorodnoye	-	記念碑等	記念碑等	142.8854556	46.62841	-	-	現地確認	
30	プリコロトノエ	-	記念碑等	記念碑等	142.885549	46.628843	-	-	現地確認	
31	電話中継所	-	遺構	遺構	142.882764	46.629133	-	-	案内による	
32	川上沢鉱	-	廃墟	廃墟	142.524028	47.1705057	-	-	案内による	
33	鉱山事務所	倉庫	倉庫	転用	142.50738	47.171831	RC	1	案内による	炭鉱関係事務所のうち安全図書と思われ。RC基壇がサハリンの別荘の基礎として使用した形跡があった。
34	川上小学校	-	遺構	遺構	142.5108316	47.1733717	-	-	案内による	
35	勝輪土台	-	記念碑等	記念碑等	142.7883606	47.3309747	-	-	案内による	
36	落合第一小学校	落合第一小学校	落合第一小学校	建物遺存	142.7889808	47.3316598	RC	1	案内による	落合第一小学校と同敷地内
37	落合第一小学校	遺構	遺構	遺構	142.78939	47.33161	-	-	案内による	落合第一小学校と同敷地内
38	記念碑	記念碑等	記念碑等	遺構	142.787738	47.331983	-	-	案内による	煙突のみ残存
39	不明	遺構	遺構	遺構	142.78844	47.33196	-	-	案内による	
40	蔵	住宅	住宅	転用	-	-	RC	2	案内による	
41	蔵	商店	商店	転用	142.79171	47.32984	RC	1	案内による	
42	王子製紙落合工場	醸房設備	醸房設備	転用	142.789718	47.33747	RC	-	案内による	
43	住宅	-	廃墟	廃墟	142.7953819	47.336816	木	1	案内による	案内に「(2002) では二宅か?」
44	樺太庁倉庫群	住宅	住宅	同用途での使用	-	-	煉	2	案内による	案内に「(2002) では二宅か?」
大谷 Sokol ソコル										

住居など個人所有の建造物等は位置情報を表示していない。また、製紙工場などの複合建造物をまとめた場合の位置情報は、筆者が確認した代表地点とする。「樺太期建造物の根拠」では、既往成果として学術的に報告されたものを中心に、特に主要な典拠を記した。市街図は、いずれも北海道大学北方資料データベースにて公開されている。1928 (昭和3) 年樺太庁発行のものを用いた。

別表 (2/2)

地名	現地名	取用途	現存形態	緯度	経度	構造	備考	
白洲	Vzmore ブズモリエ	観光施設	遺構	142.525575	47.856748	-	角ほか (2002) 参通に新たな階段を設置する工事中であった	
		-	遺構	142.518381	47.846665	-	案内による	
		建物遺存	建物遺存	142.7796173	46.6330421	RC 1	案内による	
		建物遺存	建物遺存	-	-	-	案内による	
北進古丹	Porechye ゴレチエ	住宅	同用途での使用	-	-	-	案内による	
		広場	遺構	142.7754161	48.6205319	-	角ほか (2002)	
知取	Mikarov マカロフ	ゴミ廃棄所	遺構	142.7833647	48.6319564	RC	角ほか (2002)	
		-	廃墟	142.952714	49.1018631	棟 1	案内による	
内路	Gastello カステェロ	-	廃墟	142.9500091	49.103859	RC 1	案内による。「飛行場記録(樺太の軍事関係建築物群 (防衛研究所蔵資料))」	
		住宅	同用途での使用	-	-	棟 2	案内による。角ほか (2002) でのマ ンサードの痕跡。	
歌音	Poronaysk ポロナイスク	ターチヤ、倉庫	転用	-	-	木 1	現地住民の案内による。旧名称は市街 図より推測。	
		-	廃墟	142.9446538	49.1050861	RC 3	案内による	
		-	廃墟	142.9572304	49.099912	木 1	証書残存の残存より	
		日本人傭兵バルブ歌音工場	廃墟	143.1008913	49.229731	RC	角ほか (2002)	
		-	廃墟	143.06794	49.22113	RC 3	案内による	
		取水塔	住宅	同用途での使用	-	-	棟 1	角ほか (2002) 一部廃墟もあり
		25連隊隊官舎群	公園	建物遺存	142.797259	49.849068	RC 1	案内による。説明パネルあり。
		トーチカ	公園	建物遺存	142.775096	49.961001	RC 1	案内による。説明パネルあり。 2つ残存。丸太のトーチカも再建され ている。
		-	建物遺存	建物遺存	142.8051253	49.861784	RC 1	現物確認
		沼尻	Tomari トマリ	観光施設	遺構	142.071355	47.71585	-
野田	Chekhov チェホフ	個人所有	同用途での使用	-	-	RC 2	案内による	
		個人所有	同用途での使用	-	-	RC 2	案内による	
		泊屋支庁庁舎?	建物遺存	142.0661	47.766	棟 1	市街図より推測。欄間窓の増設。	
		記念碑等	記念碑等	142.7883606	47.3309747	-	案内による	
		発電所	転用	142.0742732	47.682896	RC	角ほか (2002)	
		王子製紙社宅	住宅	同用途での使用	-	-	木 1	案内による。74と同じ形跡である。
		王子製紙社宅2	住宅	同用途での使用	-	-	木 1	角 (2003) に記述されている社宅地 をもとに転建。和小屋組露出。
		王子製紙野田工場	-	廃墟	141.981574	47.450849	RC	角ほか (2002)
		小学校職員用舎?	住宅	同用途での使用	-	-	木 1	案内による
		小学校職員用舎2?	住宅	同用途での使用	-	-	木 1	案内による
		野田小学校奉安殿	-	建物遺存	141.97202	47.444448	RC 1	角ほか (2002)
		住宅	同用途での使用	-	-	木 1	証書残存露出	
		住宅	同用途での使用	142.0245729	47.2634936	木 1	証書残存露出	
		倉庫	半壊使用	同用途での使用	142.020951	47.3065326	木 1	案内による
真岡	Kholmisk ホルムスク	船泊用	廃墟	142.0364309	47.0366155	RC	角 (2003)	
		住宅	同用途での使用	-	-	木 1	角 (2003) に記述されている社宅地 をもとに転建。アハート建群によってほとんど失われ ていた	
		-	建物遺存	142.0580339	47.0813246	RC 1	案内による	
		公園	廃墟	142.0538417	47.055374	RC 1	案内による	
真岡神社	-	遺構	142.049945	47.046124	-	案内による 参道の階段及び手水等の遺物の残存。		

住居など個人所有の建造物等は位置情報を表示していない。また、製紙工場などの複数建造物をまとめた場合の位置情報は、筆者が確認した代表地点とする。「樺太期建造物の根拠」では、既往成果として学術的に報告されたものを中心に、特に主要な典拠を記した。市街図は、いずれも北海道大学北方資料データベースにて公開されている。1928 (昭和3) 年樺太庁発行のものを用いた。



1 樺太庁博物館



2 豊原町役場



3 樺太庁部長官官舎



4 拓殖銀行豊原支店



5 不明



6 守備隊司令官官邸



7 王子製紙豊原工場



8 鉄道官舎



9 樺太庁会議室



10 蔵



11 樺太護国神社



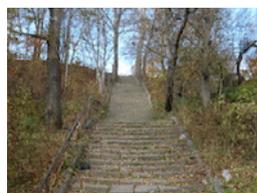
12 豊原医院



13 農業倉庫群



14 煉瓦倉庫



15 亜庭神社



16 奉安殿



17 王子製紙大泊工場



18 拓殖銀行大泊支店



19 拓殖銀行支店長宅？



20 煉瓦倉庫群



21 煉瓦倉庫



22 石造倉庫



23 船舶関連機械整備工場？



24 樺太庁大泊庁舎



25 -



26 住宅



27 気象観測所



28 忠魂社



29 日本軍上陸記念碑



30 忠魂碑

別図(1/3)



31 電話中継所



32 川上炭鉱



33 鉱山事務所



34 川上小学校



35 胸像土台



36 落合第一小学校奉安殿



37 落合第一小学校



38 記念碑



39 不明



40 蔵



41 蔵



42 王子製紙落合工場



43 住宅



44 将校官舎群



45 東白浦神社



46 工場跡



47 奉安殿



48 気動車車両



49 住宅



50 知取神社



51 王子製紙知取工場



52 飛行場関係軍事施設



53 軍事関係格納庫群



54 将校官舎？



55 税関



56 取水塔



57 住居



58 日本人絹パルプ敷香工場



59 取水塔 2



60 25 連隊官舎群

別図(2/3)



61 弾薬庫



62 トーチカ



63 トーチカ



64 泊居神社



65 橋



66 奉安殿



67 郵便局?



68 蔵



69 蔵



70 泊居支庁庁舎?



71 胸像土台



72 王子製紙泊居工場



73 王子製紙社宅



74 王子製紙社宅 2



75 王子製紙野田工場



76 小学校職員用官舎?



77 小学校職員用官舎 2?



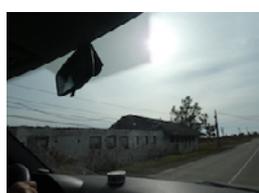
78 野田小学校奉安殿



79 住宅



80 住宅



81 倉庫



82 王子製紙真岡工場



83 王子製紙社宅群



84 奉安殿



85 奉安殿



86 真岡神社

別図(3/3)

Conservation Status of Japanese Imperial Period Buildings in South Sakhalin

SUZUKI Akiyo

In Sakhalin, many buildings remain from the Japanese imperial period (1905-1945, throughout this study referred to as the Karafuto period). This paper reports on Karafuto period buildings visited by the author during field studies in Sakhalin during the 2019 fiscal year. During these studies, we inspected 86 sites, including ruins and remnants. Of these sites, 36 were still presently being used for some manner of purpose. In this paper, we consider these inspected buildings to be historical materials indicating the transition from Karafuto to Sakhalin, from which we have selected five characteristic examples to highlight: ① The central city of Toyohara (presently Yuzhno-Sakhalinsk), ② Karafuto period paper mills seen today, ③ Examples of reuse as a residence, ④

Examples demonstrating architectural historical value, ⑤ Examples of specialized reuse.

There is an overall tendency for what were important facilities during the Karafuto period or were constructed of durable materials such as steel-reinforced concrete or brick to still be in use. Another important discovery was that the historical value of Karafuto period buildings has been recognized, with visible maintenance efforts in place.

I plan to develop a database of buildings visited during this study, which will also include related materials.